

コンタクト・インプロヴィゼーションにおける“disorientation”の概念

福本 まあや*

The Conception of “Disorientation” in Contact Improvisation

FUKUMOTO Maaya

abstract

The purpose of this paper is to clarify the conception and role of the word “disorientation” in Contact Improvisation (CI), a dance improvisation form initiated by Steve Paxton in 1972.

Through this paper, it is clarified that CI practitioners have been paying attention to and seeing values in the aspect of “disorientation” experienced in the practice of CI. They are using the word “disorientation” as (1) the unsuitable state that can be seen in beginners losing their direction and caused nausea, (2) the acceptable state/moment with using peripheral vision, developing kinesthetic sensation, yielding to the blended force and trusting one’s physical ability, and (3) the desirable state/moment that makes possible to be free from one’s habit and experience the essence of improvisation. It is concluded that the conception of “disorientation” has supported the continuous improvising practice in CI and has been the double driving force to product exquisite movements, not only acrobatic which enabled by highly developed physical sensation through CI, but also new movements free from one’s habit.

Keywords : Contact Improvisation, improvisation, dance, Steve Paxton, disorientation, peripheral vision, kinesthetic sensation, the blended force

はじめに

コンタクト・インプロヴィゼーション (Contact Improvisation. 以下 C.I. と略す) は 1972 年合衆国にて舞踊家 スティーヴ・パクストン (Paxton, Steve. 1939-) が「接触を通して行われるコミュニケーションの探求」(Paxton 1981a: 47) を即興の焦点として始めたダンス即興の形式である。

C.I. の実践者ら¹の活動は、1975 年に発刊され現在も年 2 回刊行されている機関誌 *Contact Quarterly* (以下クオタリイ誌と略す) に辿ることができる。クオタリイ誌は、瞬く間に広がったこの形式が多くのケガを引き起こす危険な活動となりつつある状況をパクストンらが憂い、著作権制限と指導者資格の発行を行うこと及び中心グループの活動を伝えることを目的として (Smith 1975: 1)、75 年 4 月に *Contact Newsletter* として発刊された²。しかし数ヶ月後には著作権制限と指導者資格の発行という作業は省かれ³、中心グループではなく C.I. に関わる全ての人々の活動と指導法を共有し C.I. を自由に討論する場として機能することとなった⁴。心配された実践に際しての安全の確保は、クオタリイ誌と各地でのワークショップや指導者会議などを通して保たれ、パクストンは創始者として自らの関心を述べる形で形式の方向性をゆるやかに示すに留まった。パクストンは「略奪可能なもの

キーワード：コンタクト・インプロヴィゼーション、即興、ダンス、スティーヴ・パクストン、方向喪失、末梢的視覚、運動感覚、合力

*平成 13 年度生 比較社会文化学専攻

(plunderable)」(Ryan 1997: 17)としてC.I.が展開することを望んだため、C.I.においては経験や技量が明示されることは無く、誰もが指導者となりクラスを開催することができ、指導法のオリジナルが問われることは無い。

パクストンと実践者らによる探求を経て1980年代半ばにはほぼ指導法が確立される⁵。現在では上演舞踊の領域に留まらず、自己探求やコミュニケーションを楽しむ実践形式として、また身体に障害をもつ人々と共に踊るインクルーシブな活動としても展開している。C.I.は現代の上演舞踊に新しい身体イメージと動きのボキャブラリーをもたらした(Novack 1990: 235; Horwitz 1995: 66; Burt 1995: 154-155)と評価される一方で、「若い世代のアーティストは、ダンサーらが共に取っ組み合っただけと見ていて」(Banes 2003: 79)とも指摘されている。日本には1990年代になって欧米の指導者が来日し指導するようになり、現在彼らに学びまた欧米で学んできた者たちが活動を展開し、日本の現代舞踊の振付にもその影響を見ることができる。

筆者はこれまでに、C.I.のスキルの概念と指導の実践に関する研究(福本 2000, 2002)、及びC.I.の指導法とリリース・ワークの関係に関する研究(福本 2003)を行ってきた。

C.I.は上演作品として結実することを主たる目的とせず、実践者らが探求の焦点を共有する実践の形式であるため、上演舞踊史研究ではほとんど言及されることはない。また、C.I.の社会的影響や役割を論ずる研究⁶は見られても、指導者や実践者が活躍する欧米においては、その指導法やスキルに関する理論は研究の主たる対象とならず、実践者の記述としてクオタリイ誌に残されたままである。C.I.における即興の考え方を明らかにすることは、ダンスの即興とは何かという大きな問いに対する一つの事例を提供することになると考えられる。

1. 研究目的と研究方法

(1) 研究目的

本研究の目的は、C.I.の実践を支える即興の考え方を探る一つのステップとして、実践者らが用いている“disorientation”という語に着目し、C.I.におけるこの語の概念を明らかにし、C.I.におけるこの語の位置づけを試みることである。

(2) 研究方法と先行研究

筆者は初期実践者のスキルに関する記述の整理を通して、C.I.のスキルとして「方向喪失(disorientation)を受け入れる感覚」を指摘した。その際、このスキルを一時的な方向喪失を受け入れつつも「重力の感覚」によって方向、つまり下はどこかを見失わない感覚として説明した(福本 2000: 43-44)。しかしその後、研究を進めるにつれて、実践者らは“disorientation”という語に幾つかの意味を含めて用いており、これがC.I.の即興経験を理解する上では、考察を要する鍵となる語であると筆者は着目するようになった。“disorientation”という語に含まれる「方向付け」とは空間に起因する感覚や認知構造であるだけでなく、象徴的な意味をも含まれるのではないかと考えられる。

先行研究では“disorientation”は断片的に言及されている。シンシア・ノヴァック(Novack, Cynthia Jean)は「spatial disorientationはC.I.という形式に独特のものである」とし、それはその実践が身体を接触させつつ行う体重のやりとりであることに由来すると説明している(Novack 1990: 189)。伊藤真喜子は“disorientation”を「単に動きの方向が明確でない」ということだけではなく、眼を閉じて動いたり逆立ちなどによって視界が大きく変化した場合に生じる新たな感覚と説明し、C.I.において重視されダンサーにとって新しい経験となると説明している(伊藤 1998: 53-54)。またC.I.の実践書をまとめたトーマス・カルテンブルンナー(Kaltenbrunner, Thomas)はC.I.のメソッドを紹介する文脈で「disorientationの価値」という項目を挙げている。彼はC.I.を通して経験される習慣的ではない姿勢や動きが「a certain disorientationを引き起こす」とし、「そこにはいくらかの利点がある」とする。その利点とは「動きの癖が消え」「今ここへの気づき



図1. Andrew de L. HarwoodとJudit KerryによるC.I.のワークショップの様子

※閉眼2人組みで、接触を保ちながら互いの上や下で転がり、計画無く互いに動かされるエクササイズ。「disorientationを経験して」と指導者は声をかける。

(2005年10月イタリアにて福本撮影)

が増し」「持続的に変化する状況によりオーセンティックにコンタクトする」ことと説明している (Kaltenbrunner 1998: 99)。

C.I. の考え方や方法論を理解する上での難しさは、実践者らがその実践について多く書き残していながらも、特定の個人が構築した理論に基づいていないため、それぞれの立場で用語を用いている場合があったり、ほとんどの読者が実践者であるために、特有の言いまわしや断片的記述が多いということである。したがって、“disorientation” の概念を捉えるにはできるかぎり多くの用例をとりあげ、同義の説明が別に無いかを参照しつつ、その意味を明らかにすることが必要となる。

そこで本研究の研究方法は文献資料研究である。対象とする文献資料は前述のクオタリイ誌 (1975-2005) 及び *Dance Research* (1983-2005)、*The Drama Review* (1968-2004) に掲載された実践者らによる C.I. に関する記事とする⁷。

論の進め方は、まず実践者が用いる “disorientation” (“be disoriented”, “become disoriented” を含む) という語が用いられている記述を抽出分類する。次に分類された主な用例を “disorientation” と同義の内容と思われる記述を参照しその内容を考察する。そして C.I. の動きの原理及び空間と時間の考え方と “disorientation” の関係を整理し、C.I. における “disorientation” という語の位置づけを試みる。

(3) コンタクト・インプロヴィゼーションの動きの原理、空間性、時間性

“disorientation” の考察の前提となる C.I. における動きの原理と空間及び時間の考え方についてここにまとめる。

C.I. においては「相互に動く塊に用意されている最も通りやすい通り道を通して動くこと (working along the easiest pathways available to their mutually moving masses)」(Paxton 1975: 40) が動きの原理とされる。この最も通りやすい通り道とは、相互に動く二者とそこに加わる重力などの物理的な力との合力によって生じるもので、理想的には二者のどちらの力とも異なるため予測不可能な動きを両者にもたらす⁸。この合力をできるかぎり保存するように効率的に動こうとするならば、その動きは水平線を保持する空間性を越えて円状、螺旋状の動きの流れとして経験され、二者には持続的な姿勢変化が引き起こされる。

動きの原理に基づいて生じる C.I. で問題となる基本的な空間性は、身体から 360 度の方位に広がる「動きの球体」(Lori b 1996: 45)⁹と考えられている。そこでは高い低いという動きの空間的レベルよりも、それらが連続してつながっているという空間感覚 (Tomsky 1985: 45; Martin 1993: 58 ほか) が重視されている。

C.I. においては、動きが即興される上で、客観的な時間軸を想定することは重視されず、自然発生的に (spontaneously) (Paxton 1975: 40; Paxton 1981b: 33; Siddall 1977: 3 ほか)、動きが生じるにまかせる (Tomsky 1985: 45) ことが重視されている。一般に振付家は作品における独自の美学を持ち、動きや様々な演出手段によって時間の流れを構成し作品世界を構築するが、C.I. では「結果を達成することに励むのではなく、むしろ適切な配置やエネルギーを用いて絶えず変わりつづける物理的現実に出会うことに励む」(Paxton 1979: 26)。実践者にとっての重要な時間とは常に「今この瞬間」である。

2. 結果と考察

(1) 抽出文の分類

“disorientation” を含む記述は、スキルを論じる訓練の文脈、及び即興とは何かを論じる実践の文脈に見られ¹⁰、「“disorientation” を避けることができる」といった否定的な記述から「即興のかなめ石である」という肯定的な記述までが見られる (図 2 参照)。抽出文はここでは、否定的な内容からより肯定的な内容の順に考察してゆく。

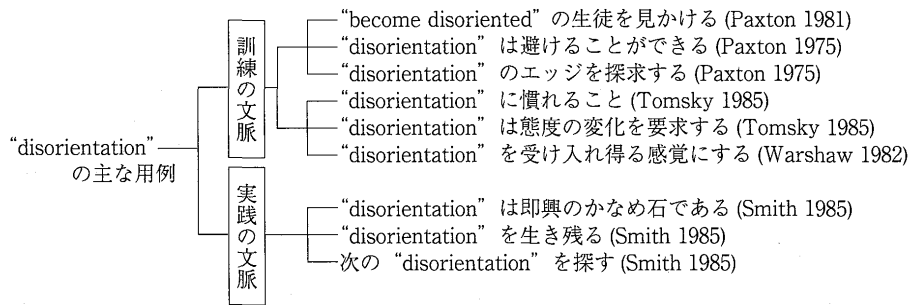


図2. 実践者の記述に見られる“disorientation”の用例分類

※“disorientation”を含む記述が抽出されたのは14記事、25文である。そのうち否定的な用例は4記事6文に見られ、肯定的な用例は9記事18文に見られた。また、C.I.とは関わりが無い用例が1記事1文に見られた。この図はC.I.と関わりのある用例を文脈で区分し、さらに内容を否定的から肯定的なものの順に分類し作成した。

(2) 訓練の文脈における“disorientation”

① “disorientation”は避けることができる

パクストンは「空間への方向付け (orientation to space)」という訓練の説明で“disorientation”という語を用いている (Paxton 1975: 41)。彼は「disorientation とのエッジを探求することで、空間への方向付けは訓練される」と述べ、「空間への方向付け」とは、「どこにいるか、より重要なことは、下はどこかを知りながら」動くことと述べている (Paxton 1975: 41)。従ってこの場合の“disorientation”とは、自分がどこにいるか、下がどこか分からないという「方向感覚を喪失した状態」を意味すると考えられる。

同様の語の用法は次の記述にも見られる。

私は前転を決して覚えていられない生徒を見てきたし、一度に1/2以上転がると方向感覚を喪失する (become disoriented) 生徒を見てきた。(Paxton 1981a: 49)

こうした「方向感覚を喪失した状態」は、自らの身体を効率的に動かすことができないばかりか、他者や床との衝突をも引き起こしかねない。そのため、C.I.では訓練によって克服すべき、避けるべき状態として考えられていることが分かる。次の記述には、どのようにその状態を避けることができるかが書かれている。

Disorientation は、末梢的な視覚 (peripheral vision) の注意深い訓練や、簡単なタンブリング、そして混乱しやすい妙技を調べることで避けることができる。(Paxton 1981b: 33)

日常において我々は方向感覚を視覚 (水平線)¹¹に大きく頼っており、このことによって特に頭部の動きが無意識のうちに制限されている。そこで、この記述に見られるとおり、C.I.では焦点を定めず視界を広く保つ「末梢的な視覚」¹²や転がることなどを通して三半規管や内受容感覚による方向感覚を訓練する。身体の空間に占める位置の判断を運動感覚に担わせることで、持続的な姿勢の変化が経験される実践時においても、自身の位置と形を容易には見失うことなく、「最も通りやすい動きの通り道」についてゆくことが可能になる、というわけである。学習初期の“disorientation”は後に避けることができるようになる、と捉えることができる¹³。

② “disorientation”に慣れること

吐き気を和らげること、又は防ぐこと：(…) 自分自身がゆくにまかせることと be disoriented にまかせること、(…)、身体にある感覚へと注意を払うこと、身体のどこに自分がいるか、disorientation に慣れる事。フォーリング／disorientation は、この新しい状態が問題無く安全であるものにさせながら、態度の変化を要求する。(Tomsky 1985: 45)

この説明は、指導者会議¹⁴の報告記事に見られる。「be disoriented にまかせる」「disorientation に慣れる」という内容は、“disorientation”を肯定的に捉えている内容である。が「吐き気を和らげ防ぐこと」を目的とする訓練内容に含まれているとすると、ここでいう「慣れること」は、前項の「避けることができる」に矛盾しないだろう。つまり、C.I.の動きによって方向感覚の混乱状態は、吐き気やめまいをひきおこす始めの段階を克服することで、徐々に引き起こされにくくなる。また、新たな動きによって運動感覚さえも働かない方向感覚の喪失が引き起こされた時にも、その状態は問題無く経験される、すなわち「慣れる」ことができると理解できるからである。

しかし、「“disorientation”に慣れる」と積極的に捉えることで、強調される側面は、そのことによって変化する側面である。それが「“disorientation”は態度の変化を要求する」から読み取れる。「自分自身がゆくにまかせることと disorientation にまかせること」と記述されているように、“disorientation”に慣れ、“be disoriented”にまかせることを妨げるのは単にめまいや吐き気ばかりではなく、動きをコントロールしようとする態度にもあるということであろう。

前述した C.I. における動きの原理に基づいて考えると、C.I. では動きの主体は二者と重力からなる合力であると捉えられる。この合力に動きの主体を譲ることの重要性を、実践者らは次のように指摘している。

これ [C.I. における動き] はすべて意図を持って行なう (do with intent) べきであり、それは最小限であるべきで、一方意図を感じとること (the sensing of intent) は、最大限であるべきなのだ。(Paxton 1975: 41)¹⁵ ([] 内は筆者による補足)

それは何よりもまず、現在の瞬間に道を譲る能力 (the ability to yield to the present moment) を要求する。(Siddal 1976: 19)

これらの記述に見られる「意図を最小限に保つ」「現在の瞬間に道を譲る」ことは、動いている者が自ら動くとしながらも、その意図に反して動かされる事をも受け入れることである。すなわち二者と反動や重力といった物理的力による合力を受容し、合力に動きの主体を譲ることが C.I. の実践において重要であることが分かる。

一方、動きの主体を合力に譲るということは、即興という自己責任的な活動に従事しようとする学習者にとって簡単なことではないと考えられる。C.I. の指導者らは、そうした学習者が抱える問題に気づいており、「パートナーリングをする上での社交的期待」(Paxton 1976: 8) から自由であることや、「動きを決定する傾向を放棄する」「保証をつくり出そうとする傾向を放棄する」(Siddal 1976: 20) が必要であると指摘している¹⁶。「“disorientation”に慣れる」ということは、視覚に頼らない方向感覚の発展に加え、最小限の意図を持って動きながらも合力に動きの主体を譲ることと捉えられる。

③ “disorientation”を受け入れ得る感覚とする

“disorientation”に積極的な意味を含める例は次の記事にも見られる。

コンタクト・インプロヴィゼーションでは感覚が教育される必要がある。Disorientation を受け入れ得る感覚としなければならない。長さで支えられリリースした身体が発展される。自信と親しみやすさを通して忍耐強く育まれた信頼 (trust) は、多様性に備えて方法を準備する。信頼を通して、不恰好さや傷つきやすい不快な瞬間と、妙技の力強い瞬間は等しく豊かなものとなる。(Warshaw 1982: 21)

この記事に見られる「disorientation を受け入れ得る感覚とする」は、吐き気やめまいが引き起こされる最初の段階を克服することで、新たな方向感覚の混乱状態が経験されている場合においても、吐き気やめまいを起こすことなく、その経験を受け入れる必要があると捉えることができる。そしてここでは、そうした感覚を受け入れることを可能とする方法が2点挙げられている。初めの「リリースした身体が発展される」とは、重さの感覚をマスクする慢性的な緊張を解く (リリースする) ことで視覚に頼らない運動感覚の発展が可能となるからと理解できる。しかし「忍耐強く育まれた信頼は、多様性に備えて方法を準備する」というこの「信頼」とは誰 (何) に対する信頼であろうか。この記述からでは分かりにくいですが、次の記述にはそれが何かが見られる。

エネルギーに満ちた身体的な disorientation の状態において、自分の基本的な生存本能を信頼しながら (trusting one's basic survival instincts) 安全にワークすることができるよう、感覚がよく準備された、用心深い状態を発展させることは重要となる。(Lepkoff 1977: 4)

ここには「自分の基本的な生存本能」を信頼すると述べられている。「基本的な生存本能」とは、意識による判断を介さない身体の反射能力を意味するものであろう。C.I. では様々なエクササイズを通して身体が反射的にどのように賢く、また効率的に動くかが訓練されるため、自らの身体の反射能力を信頼することで “disorientation” を受け入れることができるようになるということが分かる¹⁷。

この場合 “disorientation” とは、方向感覚の一時的な喪失に加えて、動きの只中で次に何が起こるか分からない、何を選択するか予測は無いという瞬間／状態を意味すると捉えることができる。

(3) 実践の文脈における “disorientation”

① “disorientation” は即興のかなめ石である

最初期からの実践者の一人であるナンシー・スターク・スミス (Smith, Nancy Stark) は次のように述べている。

過去何年間か、私にとって disorientation は、C.I. を指導することと実践すること、そして即興を上演することにおいて中心的なテーマとして再登場してきている。コンタクトにとって身体的生き残りのスキル (a physical survival skill) として始ったものが、私にとっては、かなめ石 (a keystone) となってきている—コンタクトしている身体の生き残りのためばかりか、即興の生命力と心のために—。(Smith 1985a: 3)

この記事から、スミスにとって“disorientation”は即興の生命力を保つ重要な概念となっていることが分かる。彼女は同記事において“disorientation”を「参照ポイントの一時的な不在」、「どの方向にも動くことができる優位性」をもち、「予期せぬ出所からの衝動にむかう道を浮かび上がらせる」瞬間／状態として説明している。すなわち習慣的な動きの選択や、習慣的な動きの衝動から自由になる可能性が開かれている瞬間や状態であると捉えることができる。この“disorientation”と同義と考えられる語が次の記述に見られる。

喜んで自分の視点を危険にさらし、一時的に途方にくれる (to be temporarily at a loss) ことが無ければ、即興することは、既に完全に明らかなことを繰り返し述べる眠たいエクササイズになり得る。(Smith 1985a: 3)

ここにおける「一時的に途方にくれること」は彼女の用いる“disorientation”と同義にあたると考えられる。スミスが即興のかなめ石として捉える“disorientation”という語は、「方向感覚の喪失」に加え「一時的に途方にくれる状態」と捉えることができる。それは、最小限に保たれていた意図がゼロにならざるを得ない瞬間、またはゼロにされてしまう瞬間、すなわち主体の喪失が生じる瞬間をも意味すると理解される。

こうした考え方は、パクストンの次の説明にも見られる。

見失うこと (getting lost) はたぶん新しいシステムを見つけることへの最初の一步であろう。新しいシステムの部分を見つけることは、見失うことからの報償 (rewards) の一つである。(…) 我々はここで即興に近づいている。見失った時、我々は見知らぬことや変化している状況に適切に関係しなくてはならない。(Paxton 1987: 19)

この記事における「見失うこと」はスミスの“disorientation”や「途方にくれる」と同じ瞬間や状態を指しているものと思われる。パクストンはここで、人は新しいシステム¹⁸に出会った時、それを無意識的に古いシステムに調整してしまう習慣があると指摘し、「見失う」ことが新しいシステムに開かれた道であると指摘している。そして、さらに次のように説明している。

(…) 辞書において即興は“即席の (extemporare)”または“out of the time”を意味すると説明されている。私は、“out of the time”に2つの矛盾する解釈を提案する。(…) time を人間の持続期間の経験と等しくすることを提案する、それは言わば、人生において蓄積した経験であり、そうすると“the time”は我々が誰になっているか (what we have become) を意味することになるだろう。“Out of the time”は経験の外側に一意識してであろうとなかろうと—何かをつくるための素材があるということの意味するだろう。(Paxton 1987: 19)

ここでパクストンは、即興を意味する“out of the time”を「既に我々がなっているもの」の外側に何かをつくるための素材があると解釈する、と述べている。「既に我々がなっているもの」の外側とは、自分の記憶やイメージの外側ということであろう。さらに彼は続けて、「out of”は、“aside from (を除いて)”と解釈すべきだ」と述べ、即興とは「既に我々がなっているもの」を除いて行われる何かであると説明する。パクストンにとって、即興はそれまでの動きの習慣から抜け出て、新しい動きの経験を目指すものであることが分かる。そこでは、これまでの自分を取り除き「途方にくれること」が重要な鍵となる。

スミスが即興のかなめ石とする“disorientation”は、パクストンの説明にある「途方にくれた」状態にあたり、自らの身体を自らの意図で動かすという意味での主体が喪失された瞬間／状態であると考えられる。

こうしたC.I.の実践経験の側面を意味する“disorientation”の用例は、本研究ではスミスの記事にのみ確認されたものだが、「“disorientation”の概念を広げたかった」(Marinerlli 1992: 68) や、既に述べた“disorientation”には利点がある」とするカルテンブルナーの説明にも同様な意味合いが捉えられる。つまり、“disorientation”はC.I.という即興を何故行うかという理由の核を説明する瞬間／状態である。

② 次の“disorientation”を探す

“disorientation”は即興のかなめ石であるとするスミスは、それが彼女の即興経験の中で、どのように変化してきたかを次のように述べている。

最初は躊躇しながら試みられたり、生き残ってきたものが、次の時には、より勇気をもって接近され、間もなくそれは自動的になされる。しばらくすると、本当の挑戦は‘どのようにこのdisorientationを生き残るか’から、‘どこに次の[disorientation]があるか?’へと変わる。(Smith 1985: 3) ([]内は筆者による)

ここにある「躊躇しながら試みられたり、生き残ってきた」とは、“disorientation”が動きの流れから必然的に生じ、運動感覚の発展を要求する段階であろう。また「勇気をもって接近され、間もなく自動的になされる」段階は、その感覚に慣れ、受け入れ得る感覚となっている段階であると考えられる。しかし、「どこに次のがあるか」が本当の挑戦となるとはどういうことか。それは、動きの原理が引き起こす“disorientation”から生き残ることによって新しい動きの経験が可能となる段階から、経験を重ねるうちに、動きの原理がもたらす動きの流れが既に知られた通り道へと自動的に流れ、その結果、逆に新しい動きの経験をする可能性が消失してしまう段階が生まれるということの指摘と理解することができる¹⁹。“disorientation”はそうした段階において、まだ経験されていない動きの流れの可能性があることを見出すための鍵となる瞬間／状態として捉えられていることが分かる²⁰。

(4) “disorientation”と動きの原理、時間性、空間性との関係

“disorientation”という語は、極めて消極的な意味から極めて積極的な意味において用いられていることが明らかとなった。この語とC.I.の動きの原理との関係は図3のように整理して示される。

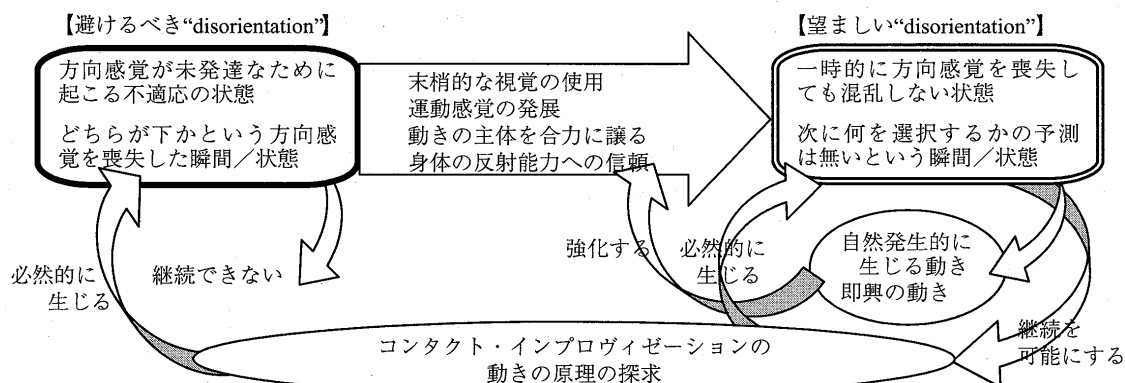


図3. “disorientation”の概念と動きの原理の関係 (福本 2006)

動きの原理を実践する上で、必然的に経験される姿勢の変化が、吐き気やめまいなどの不適応の状態（＝避けるべき“disorientation”）を生み出す。その状態は、末梢的な視覚、発展された運動感覚、主体を譲る態度と身体の反射能力への信頼という4つの側面に支えられて克服され、動きの原理の探求を可能にしていると実践者の記述から捉えられる。また、そうして可能となった動きの原理の探求が、新たに生じさせる一時的な方向感覚の喪失や何を選択するか予測は無いという瞬間／状態（＝望ましい“disorientation”）は、避けるべき“disorientation”を克服する上で必要であった4つの側面をさらに強化する契機となる。このようにしてC.I.を通して、人は動きの習慣や癖から自由な新しい動きを経験することが可能となっていると捉えられる。

また、一時的な方向感覚の喪失を積極的に受け入れることは、日常生活における垂直と水平の軸に広がる動きの空間から、360°に広がる「動きの球体」という空間を探求することを可能にする。

一方、何を選択するか予測は無いという瞬間／状態は、既にC.I.の時間性として述べた「自然発生的に動きが生じるにまかせる」といった時間の考え方に通じるものであることが分かる。“disorientation”を受け入れることによって、自然発生的に動きが生じることを受け入れることが可能となるのである。が、さらに訓練と実践が続けられる中で自然発生的な動きの流れが「自動的になされる」ようになる時、何を選択するかを予測できない状態／瞬間の積極的な評価は、まだ通ったことの無い新しい動きの経験へと開かれている通り道を探すことに

つながっている。この何を選択するかは予測は無い瞬間とは、動きの自然な発生が保留され動きの流れが途切れた瞬間とも言い換えることができるだろう。

3. 結論

本研究では実践者らの記述に見られる“disorientation”の概念を明らかにし、C.I.におけるこの語の位置づけを試みた。実践者の記述においては“disorientation”という語は、訓練・学習から実践のプロセスにおいて経験される瞬間や状態を意味する語として用いられていることが確認された。学習初期の段階で経験される“disorientation”は、方向感覚が未発達なためにおきる不適応の状態と捉えられた。方向感覚の発展した次の段階で経験される“disorientation”は、一時的に方向感覚を喪失しても安全に元にもどることができる状態であり、動きの只中で次に何が起こるか分からない、何を選択するかは予測は無い瞬間／状態と捉えられた。また、即興の実践時に経験される“disorientation”は、実践者らが考える即興の本質を可能とする瞬間をも意味し、「方向感覚の喪失」に加えて、「途方にくれた状態」であり新しい動きの可能性へと開かれた瞬間／状態と捉えられた。

ダンスには様々な即興の方法があるが、一般的にその活動は主体的で自己の内面を外側に向かって表現する活動と捉えられている。しかしC.I.においては、動きは他者と自分と物理的な力との合力によって動かされた産物として見ることができ、主体的であることよりは合力に主体を譲る委任の態度が強調され、自然発生性という受容的な側面が強調されている。“disorientation”はこうした原理がひきおこす究極の瞬間であると考えられる。最小限の意図が限りなくゼロに近づいた瞬間である。この瞬間にこそ、これまでの習慣や経験から自由な新しい動きが経験され得る、そこに即興を行う理由の核となる経験があると実践者らが指摘していることが明らかとなった。それはC.I.の動きの原理の探求を支え、C.I.の妙技―高度に発展した運動感覚が可能とするアクロバット性と共に、習慣から自由な新しい動きという意味における妙技―を生み出す二重の推進力となっていると考察される。

尚、本論では実践者の記述を整理する文献資料的方法をとったが、実際に経験される“disorientation”の状況を具体的に検証することが必要と考えられる。今後の課題としたい。

註

- 1 本研究では、C.I.を実際に行っている者を実践者 (practitioner) と呼ぶこととする。
- 2 *Contact Newsletter* としては1巻1-5号及び2巻1号まで発刊され、2巻2号から *Contact Quarterly* という名称になる。
- 3 その理由は「既に無数の指導者が指導にあたっている現状から、彼らにとって負担となるし、我々もそれをしないでよいという結論を得てほっとしている」(Smith 1975: 1) とある。
- 4 クオタリイ誌の主な掲載内容は①C.I.の思想や実践に関する記事、②C.I.の実践に参考となる演劇やダンスに関する記事や③ソマティック・ワークに関する記事、④他紙に掲載されたC.I.に関する評論の転載、⑤読者からの手紙、⑥関連書籍の紹介、⑦C.I.に関係するイベントやクラスの開催情報、⑧実践者の住所録である。
- 5 この指導法の確立とは、安全に学習を展開するための導入部や基本的な動きの素材が共有され70年代に行われていた指導法についての議論が80年代には中心的な事柄ではなくなったということである(福本 2000: 24)。
- 6 例えば、C.I.の学習経験が自己への気づきに及ぼす影響を調査した研究 (Wilson 1985)、C.I.を元に拒食症患者を対象とした療法を考案した研究 (Lamiuex 1988)、文化人類学的な視点からC.I.の平等主義的側面を明らかにした研究 (Novack 1990)、C.I.とフェミニズム運動との類似性に着目した研究 (Horwitz 1995) などがある。
- 7 他に『舞踊学』(1980-2005)、*Dance Research Journal* (1978-2004)、*Dance Chronicle* (1977-2004) を検索したが、C.I.実践者による記事は見られなかった。
- 8 本研究者の経験からもほとんどの場合は完全な合力というよりは能動的／受動的を行き来する連続になる。が、今回の研究はその振幅を考慮にいれていない。
- 9 この記事で、パクストンは彼の経歴にある器械体操、合気道、瞑想、ヨガにおける経験を統合し、「動きの球体に身体を慣れさせる」試みからこの形式を始めるに至ったと述べている。
- 10 C.I.は実践から学ぶとも言われ、訓練と実践を明確に区別することは難しい場合が多いが本研究で対象とした記事の内容を検討し、このような整理区分を設定した。

- 11 註13参照。
- 12 末梢的な視覚はC.I.に必要なスキルとして多くの実践者が指摘している。ぼんやりと前方を眺めつつ両手先で視界の両端の周縁を同時にたどる時に経験される。
- 13 クルト・シッダール (Siddal, Curt) は、人が無意識のうちに常に方向付けの基準線としている水平線の喪失を受け入れるために末梢的な視覚を用いる、として同様の内容を説明している (Siddal 1976:19)。
- 14 この指導者会議とは1985年3月にデトロイトで開催され、約15人の指導者と指導者の卵が参加したと同記事にある。
- 15 この文章に続いて「形式が理解されればされるほど、協力 (the cooperation) が主体 (the subject) - 慣性力、反動、心理、パートナーの魂とバランスをとることで定義されるひとつの "it" - となる」とある。
- 16 ほかに「そこにある動きの自然な流れに対してある程度まで意図的な判断行為を放棄することを学ばなくてはならない」(Lepkoff 1977: 4) などの同様の記述が見られる。
- 17 こうした身体の反射能力を認め、その価値を評価する傾向はC.I.と関わりの深いリリース・ワークのルーツに見られ、またバクストンが共に活動した60年代前衛舞踊のシモーン・フォルティ (Forti, Simone) らの作品にも見られる。
- 18 この新しいシステムの例として、バクストンは聞き慣れない異国の音階や新しい動きの形式をあげている。
- 19 同様の記述が次のとおり見られる。「今日必要なことは、いかにして踊りを新鮮でオリジナルなものに保つことができるかについて話し合うことである。(…) 既に知っている動きの通り道を追跡し動くことはあまりに自動的になってしまう、未知の何かが起こる隙間 (room) がほとんど残されていないということだった」(Warshaw 1982: 21)。
- 20 この実際の方法としてはスミスとランディ・ウォーシャウ (Warshaw, Randy) がともに、新しいと思われなくともそこにある動きにふけることの重要性を指摘している (Smith 1993: 3; Warshaw 1982: 21)。

引用文献一覧

BANES, Sally

2003 "Spontaneous combustion: notes on dance improvisation from the Sixties to Nineties", ALBRIGHT, Ann(ed.) *Taken By Surprise: a dance improvisation reader*, Connecticut: Wesleyan University Press: 76-85.

BURT, Ramsay

1995 *The Male Dancer*, London: Routledge.

福本, まあや

2000『コンタクト・インプロヴィゼーションのスキル研究』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文。

2002「コンタクト・インプロヴィゼーションにおける「身心の状態」に関する研究」『上演舞踊研究』3: 17 - 22.

2003「コンタクト・インプロヴィゼーションの指導法に見られるリリース・ワークの影響」『上演舞踊研究』4: 15 - 19.

HORWITZ, Carol

1995 *Challenging dominant gender ideology through dance: contact improvisation*, Dissertation, Graduate College of the University of Iowa.

伊藤, 真喜子

1998『コンタクト・インプロヴィゼーションの構造と実際』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文。

KALTENBRUNNER, Thomas

1998 *Contact Improvisation: moving - dancing - interaction*, PROCYK, Nick(transl), Aachen: Meyer und Meyer.

LAMIEUX, Adwoa

1988 *The contact duet as a paradigm for client/therapist interaction*, Masters Thesis in Dance Movement Therapy, Naropa Institute.

LEPKOFF, Danny

1977 "Contact Improvisation: A Definition", *Contact Quarterly* 2(4): 4.

LORI b

1996 "Lori b & Steve Paxton interview each other about sex and contact improvisation", *Contact Quarterly* 21(1): 43-51.

MARINELLI, John

1992 "Making Contact in Mexico", *Contact Quarterly* 17(2): 67-68.

MARTIN, Nina

1993 "Kinetic Awareness and Contact Improvisation", *Contact Quarterly* 18(2): 58.

NOVACK, Cynthia Jean

- 1990 “Sharing the dance: Contact Improvisation and American Culture”, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- PAXTON, Steve
- 1975 “Contact Improvisation”, *The Drama Review* 19(1): 40-42.
- 1976 “Dartington March”, *Contact Newsletter* 1(5): 8.
- 1979 “A Definition”, *Contact Quarterly* 4(2): 26.
- 1981a “Q&A”, *Contact Quarterly* 6(2): 47-49.
- 1981b “Contact Improvisation may be...”, *Contact Quarterly* 7(1): 33. (1972 と付記あり)
- 1987 “Improvisation is a word for...”, *Contact Quarterly*, 12(2): 15-19.
- RYAN, Peter
- 1997 “Passing the Dance: Contact Improvisation in Canada 1974 – 95”, *Contact Quarterly* 22(2): 15-22.
- SIDDALL, Curt
- 1976 “Bodies in Contact”, *Contact Newsletter* 2(1): 18-20.
- 1977 “Information Sheet”, *Contact Quarterly* 3(1): 3.
- SMITH, Nancy Stark
- 1975 “Editor note”, *Contact Newsletter* 1(2): 1.
- 1985 “Editor Note: Still in the middle”, *Contact Quarterly* 10(2): 3.
- 1993 “Editor Note: What goes up”, *Contact Quarterly* 18(2): 3.
- SMITH, Nancy Stark; NELSON, Lisa (ed.)
- 1975- *Contact Quarterly*, Massachusetts: Contact Editions.
- TOMSKY, Sharon
- 1985 “Teacher's Notebook: Contact Improvisation Teacher's Conference”, *Contact Quarterly* 10(3): 44-45.
- WARSHAW, Randy
- 1982 “What are we teaching?”, *Contact Quarterly* 7(3/4): 19-21.
- WILSON, Timothy Robert
- 1985 *The effect of creative movement and contact improvisation experiences on self-awareness*, Doctor of Education dissertation, University of Houston, Texas.

(2007 年 1 月 12 日受理)